

高齢者の Body mass index (BMI) と無障害生存との関連： 大崎市民コホート 2006 研究

The relationship between body mass index and disability-free survival in elderly Japanese: the Ohsaki Cohort 2006 Study.

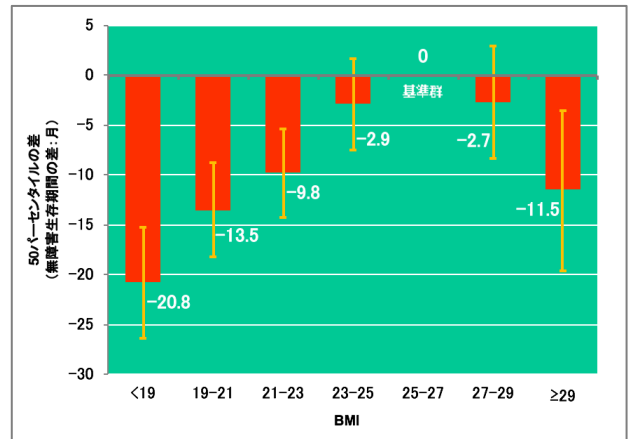
2019 年 International Journal of Obesity 発表

無障害生存期間の延長のための最適な BMI 範囲は 23-29 です

高齢者に対する最適 BMI 範囲は、若年者に対するそれよりも高い可能性があることが示唆されている。過体重の高齢者の方が、正常の体重の人や肥満の人よりも、要介護発生や死亡のリスクが低いことを示す証拠があります。しかし、BMI と無障害生存期間の延伸の程度との関連は明らかになっていませんでした。

本研究は、高齢者における BMI と無障害生存期間との関連を前向きコホート研究である「大崎コホート 2006 研究」のデータにより検討しました（図）。

結果として、BMI が 23-29 の者では無障害生存期間が有意に短縮しなかったことから、BMI が 23-29 であることが高齢者の無障害生存期間の延伸のための最適な範囲である可能性が示唆されました。



研究のデータについて

本研究は、2006 年 12 月に実施した大崎市民健康調査のデータを用いて分析を行いました。大崎市民健康調査は調査開始時点で 65 歳以上であった住民 31,694 名を対象にアンケート調査を実施し、23,091 名から有効回答を得ました。本研究ではこのうち、要介護認定の情報提供に非同意の者、ベースライン時に要介護認定を受けていた者、身長・体重のデータが欠損であった者、BMI の範囲が外れ値（<0.1 パーセンタイル及び>99.9 パーセンタイル）であった者などを除いた 12,666 名について分析を行いました。追跡期間は 10 年間で、6,005（47.4%）名の要介護発生や死亡がみられました。

BMI の範囲について

BMI の範囲を 7 つのグループ（<19, 19-<21, 21-<23, 23-<25, 25-<27, 27-<29 and ≥29）に分けました。このうち、BMI の範囲が 25-<27 の者を基準群として、無障害生存との関連を検討しました。

他のリスク要因の影響について

性別や年齢、既往歴、喫煙といった生活習慣などの交絡の可能性を考え、この研究では、性、年齢、既往歴（脳卒中、心筋梗塞、糖尿病、消化器疾患、がん）、喫煙、飲酒、運動機能、心理的ストレス、痛み、教育、地域活動への参加の要因について偏りが生じないように統計解析を行いました。

研究の特徴と限界について

この研究の特徴は、（１）無障害生存期間の差という観点で BMI が要介護・死亡（健康寿命）に与える影響を直接示した点、（２）一般住民を対象とした大規模コホートデータを用いた点、（３）様々な交絡因子を考慮した解析を行っている点があげられます。一方で、この研究の限界は、（１）BMI の情報が自己申告であった点、（２）より高度な肥満（BMI>35）の対象者が少なく、より高い BMI と要介護発生との関連を反映できていない点があげられます。